

障害者スポーツと障害者芸術活動 との比較についての一試論

小倉和夫

(日本財団パラリンピックサポートセンター)

近年、障害者のスポーツ活動と障害者の芸術活動は、共に、障害者の社会参画への触媒としての機能という観点から論じられることが多い。

その場合、社会におけるいわばマイノリティである障害者の、マジョリティたる健常者を中心とする社会への包摂(インクルージョン)という観点が強調される。その結果、健常者と共同でのスポーツ競技の実施、あるいは健常者との合同創作活動といったことが奨励され、両者の「共生」という概念がしばしば強調される。

スポーツ面でのオリンピックとパラリンピックとの融合論の広まりや、芸術活動におけるボーダレス、アンリミテッドといった言葉の出現と流行も、「共生」概念と連動した傾向と言えよう。

しかしながら、そうした概念や傾向と、いわゆる「外国人」を主に念頭においた「多文化共生」概念とは、どこが同じでどこが違うのか、また、障害者を対象とした「共生」概念とその実現の仕方は、たとえば、男女の共生、高齢化社会における高齢者との共生などどこが共通し、どこが相違するののかといった点については、必ずしも明確に論じられてはいないように思われる。

もとより、男女の共生、外国人との共生、障害者との共生などの全てにほぼ共通する視点として、マイノリティの「人権」擁護といった観点から出発することは可能である。しかし、人権擁護が、最終的には完全な自己実現の可能性を擁護することであるとすると、マジョリティの立場からの「包摂」という考え方も、その定義をよほど明確にしておかねばならないのではないかという疑問が生じてくる。

このような疑問も踏まえ、本論ではパラリンピック大会が障害者スポーツ大会であると同時に、文化的行事でもあることを念頭におきつつ、障害者のスポーツ活動と芸術活動を(相互に若干重複する点はあるも一応)、①個人の(顕在、潜在)能力発揮と自己実現の機会、②「障害」からの解放の手段、③社会的包摂の触媒、④社会的態度の転換の触媒、そして⑤商業的・経済的行為、のそれぞれの次元から、両者を比較し、共通点

と相違点を考える試みを行ってみた。

本論は、筆者のパラリンピックスポーツについての既存の研究、並びに、東京藝術大学と共同で取り組んだ「国内における障害者による芸術活動の概要」に関するリサーチプロジェクトの報告などを基礎にしたものであり、未だ全くの試論であるが、障害者のスポーツ活動と芸術活動との比較に関する今後のリサーチの対象と方向性について何らかの示唆を提示することができればという観点からとりまとめたものである。

1. 個人の能力発揮と自己実現の場としてのスポーツ，芸術活動

スポーツや芸術活動を，肉体のリハビリや健康維持，あるいは精神的安楽や気晴らしとしてではなく，むしろ積極的な意味での自己表現，自己実現の機会として見ると，スポーツも芸術活動も障害者の自己表現の機会として重要であり，成果如何にかかわらず活動自体に意味があると言える。

他方，自己表現ないし自己実現の機会として見た場合，スポーツと芸術活動には若干の違いがある。一つは評価の問題である。スポーツの「成果」は数量化しやすいので成果を評価しやすいが，芸術活動の評価は簡単ではない（作品や演技の「価格」を標準にすると，商業化されにくいものを差別することになる）。

また，スポーツの場合はアスリートが障害者であることは，普通「目に見える」形で表れるが，芸術作品や演技においてはそうでない場合も多い。そのため，作者や演者と観客の間に「障害」の意味についてのコミュニケーションが深く及ぶかどうかの問題が生ずる（もっとも，芸術にしるスポーツにしる，それが障害者の自己実現である限り，作品の成果なりスポーツの成績が重要なのであって，「障害」自体が目に見える形で表われる必要はないという見方もある）。

更に，芸術活動においては，社会的抗議，反抗を自己表現の一環として表わすことができるが，そうした要素をスポーツ活動そのものに持ち込むことは難しいことが指摘できよう。

2. 「障害」からの解放の手段としてのスポーツ，芸術活動

スポーツや芸術活動が，障害者に自己実現の機会を与えるものであるということは，それらの活動が，障害者をして「障害」から解放する手段ないし触媒となり得ることを示している。同時に，障害者に対する社会的偏見なり無理解からの解放の触媒でもある。

しかし，ここで「解放」の意味をよく考えねばならない。たとえば，社会的に成功し

たアーティストやアスリートは、「障害」から完全に解放された人達とも言える（すなわち、社会がそれらの人々を障害者とは見ず、単にアーティストなり、アスリートとして見る）。それは、これらの人々が完全に、いわば社会の「インサイダー」となったことを意味するとも言える。その場合、未だに大なり小なりアウトサイダー的な位置を余儀なくされている多くの障害者、あるいは未だに十分自己実現を果たしていない人々の立場を、こうした「インサイダー」たちは代表出来るのであろうか、という問題がある。しかも、個人的成果がめざましいものであればあるだけ、「障害」の克服はどうかすれば社会の問題ではなく、個人レベルの問題におしこめられてしまう危険が生ずるおそれもある。この点は、世間的に成功した芸術家、アスリートいずれにもあてはまるであろう（ただし、アーティストの場合、その作品からのメッセージが反権力あるいは社会への抗議的要素を多分に含む場合は、別であろう）。

「障害」からの解放という観点からスポーツと芸術活動を比較した場合、これまで述べたような共通課題や類似点のほかに、相違点も存在する。たとえば、スポーツにおいて活動は肉体的、精神的な苦難と困難からの解放、自由であるが、芸術活動ではむしろ社会の偏見や社会の通念からの解放という要素が強い（苦しみからの解放と「同情」からの解放の双方）。言い換えれば、スポーツでは障害の「克服」が前面に出やすいが、芸術活動では障害の「露出」がむしろ強調されることがある点が想起されねばなるまい（たとえば、著名なローラ・ファーガソンの裸体画などを思いうかべることができよう）。

3. 社会的包摂の触媒としてのスポーツ、芸術活動

社会的包摂の触媒としての活動という側面においては、スポーツ、芸術双方とも有効な触媒となりうることは自明であろう。

しかしながら、スポーツ活動、芸術活動ともに、社会的風習や制度、ルールに縛られており、それらが、健常者と障害者に完全に中立とは限らないことに注意を要する。たとえば、美術品の展示の高さや競技場における観衆の応援のしかたなどは、視覚あるいは聴覚障害のある観客にとっては、作品や競技を十分楽しんで鑑賞あるいは観戦できないといった問題がある。また、劇場のしつらえや照明の仕方あるいは競技場におけるトイレの位置といった、障害のある出演者や競技者から見た問題も多々あり得る。これらの問題は、かならずしも、いわゆるバリアフリーの対象として考えられていないものも多い。この点は、障害者の社会的包摂を考えるにあたって、スポーツ、芸術双方に共通する問題であると言える。

また、物理的な条件ないし環境整備に加え、障害者の社会参画に重要な介護者や同伴

者の人材育成は、芸術、スポーツ分野双方に共通する課題と言えよう。

このように、スポーツ、芸術を問わず、障害者の社会的包摂にあたり物理的、社会的環境整備が必要である点は共通しているが、他方、両者の社会的包摂促進にあたっては、留意すべき相違点が存在する。すなわち、障害者のスポーツ活動は元来、医学的観点のリハビリから出発しており、いわば肉体機能の回復の一環という点が中心になりがちである（その裏側として、健常者の肉体の機能にできるだけ近づけるという概念が強い）。一方で芸術活動は、障害を一つの個性としてとらえ、それ自体を表現するという要素が強い場合もある。したがって、障害者の社会参加促進の触媒としての活動という観点から見た場合、スポーツでは、健常者のスポーツ活動にできるだけ近づけ、健常者と障害者が一緒にスポーツを行うことによる社会参加の促進という道がとられやすい。しかしながら、芸術活動の場合は、障害そのものを個性、固有の価値と考えることも稀ではないため、社会的包摂が固有の価値の崩壊に至らぬよう留意する必要があると考えられる。

4. 社会的態度の転換の触媒としてのスポーツ、芸術活動

障害者のスポーツ、芸術活動は、多くの人々が日頃十分には使いこなしていない感性を鋭敏化させ、多様な活動、あるいは鑑賞方式を社会的に広める触媒となりうるものである。たとえば、彫刻を眼で見る代わりに触って鑑賞すること、あるいは、（視覚障害者のように）花吹雪の音や香りで花見をすることなどである。そうした感覚が呼び覚まされるような歌舞伎や能楽の作品もある。

スポーツでも、ブラインドサッカーを「見る」だけでなく、競技者とともに「音」でも競技を楽しむという、観覧にあたっての感性の転換もあり得よう。スポーツにおいてはどちらかと言えば「機能」の転換（例えば口で弓を弾く）という場合が多く、芸術では「感性」の転換（例えば彫刻を触って鑑賞する）に重きが置かれる場合が多いという傾向の違いはあるものの、こうした感性の転換は、スポーツや芸術についての社会的な態度の転換を促すことにもつながる。たとえば、茅葺きの屋根は通常「風雅」なものとなるが、視覚障害者にとっては、屋根に落ちる雨音を詩的に鑑賞できないことを意味しており、茅葺き屋根の鑑賞をめぐる社会的意味の問題を提起している（この点は、たとえば、山中に捨てられた盲目の皇子蟬丸が茅葺き小屋に住みつつ、琵琶を奏でる場面の登場する能楽作品「蟬丸」に表現されている）。

5. 商業的、経済的行為としてのスポーツ、芸術活動

障害者のスポーツや芸術活動を、潜在的な商業あるいは経済行為と考えると、まず、本人にその道のプロ（職業人）となる用意があるかないかが問われる。とりわけスポーツ選手の場合は、選手生活後の、いわゆるセカンドキャリアの問題があり、障害者の雇用機会やキャリアパスの確立という社会的問題がある。芸術家、あるいはプロアーティストを目指す者の場合は、作品や演技の「市場」をどのように構築してゆくかの問題がある。この場合、プロを育成することにより次第に市場をつくってゆくのか、あるいは、裾野を広げる活動を進めながらプロあるいはスターを育成してゆくのか、また、観客をどのように動員すべきかといった点は、スポーツと芸術に共通の課題であろう。

障害者スポーツや芸術の「市場化」には、劇場や競技場といった物理的環境整備もさることながら、介護、補助、同伴者といった仲介役が必要である。他方、市場化のためには、スポーツなり芸術がそれなりの「魅力」を備え、大衆にアピールする要素を持つ必要がある。しかしながら、一旦そうした魅力が認められ、なかばプロ化ないし市場化が成功した場合、はたして後継者の育成がうまくできるかどうか、とりわけ、障害者の全体数が増えない状況下で持続性を持った取り組みができるかどうかははなはだ疑問である。この点は、芸術、スポーツを問わず重要な課題であろう。

一方で、芸術とスポーツを比べると、いくつかの相違点が目につく。一つには、スポーツは競争的側面が強いためプロとアマチュアの区別をつけることはそれほど困難ではないが、芸術活動の場合は、両者の間に連続性がより強いのではないと思われる。

また、この点とも関連して、スポーツでは競技性のある活動と日常の活動とは（競技場の問題や競争機会の問題もあり）一応分離しうる場合が多いと考えられる。それゆえ、コーチや競技スポーツの専門家が市場化への仲介者となりうる。これに対して、障害者の芸術活動は日常生活から分離しがたい場合も多く、それゆえ、市場化への仲介者は芸術家よりも福祉関係者となりがちとなる。

さらに、スポーツでは、県単位の大会、学校対抗、国体など、ある種「制度化」された社会的仲介機能をもつ仕組みが存在するが、芸術の場合はこうした制度的機会は少ないといった違いを指摘できよう。

6. その他—特に用具の問題

障害者の活動にあたっては、車いす、義足、杖など、用具が重要な意味をもつ。スポーツでは、用具の機能が人間の身体機能を超越する場合もある。義足のランナーの有利性が議論されるなど、器具の（肉体機能の）代替性が問題になってきた。これに対して、芸術活動では、器具が肉体機能の代替として以上に象徴的な意味を持つことが多い。たとえば、車いすダンスで車いすは回転なり地面との接触の象徴となる。また、視覚障害のある人物が登場する舞台表現で杖の使い方が心の動揺を象徴する場合もある。このように、用具の持つ意味がスポーツと芸術ではかなり違ってくることも考えねばならないであろう。

Research Note on Comparison of Sports and Artistic Activities of People with Disabilities

Kazuo OGOURA

(The Nippon Foundation Paralympic Support Center)

Both sports and artistic activities of people with disabilities are considered to promote empowerment and to facilitate social inclusion. Both types of activities share many problems to be tackled, tasks to be dealt with and social impacts to be valued. It is however also true that there are a number of differences between the two.

This paper attempts to give a preliminary view on the common elements and different perspectives based on research conducted on disability sports by The Nippon Foundation Paralympic Research Group and the results of a survey jointly being carried out by the Tokyo University of the Arts and the Research Group.

The comparison has been made in five different dimensions.

1. Individual empowerment and self-realization

common aspect — both sports and artistic activities can provide good opportunities for people with disabilities to express themselves and realize their potential.

different aspect — assessment of the results of activities can be relatively easy in sports in comparison to artistic works.

Disability is more visible in sports activities, so that their impact in terms of social education may be different from that of artistic activities.

2. Catalyst for liberating people with disabilities from “disability”

common aspect — through sports and arts, people with disabilities can overcome and liberate themselves from “disability”.

different aspect — such “liberation” may be achieved in the case of artistic

activities through the artistic expression of resistance or even revolt to established norms or values, while such elements of resistance or revolt are rarely if ever witnessed in sports.

In sports, such liberation tends to take the form of overcoming difficulties, and in some cases, overcoming stifling social compassion associated with disability, whereas in arts, liberation tends to be linked with expressing disability and with turning disability into individuality.

3. Catalyst for social inclusion

common aspect — both activities can be effective catalysts for people with disabilities to become more “integrated” or “included” in society in general. In order for both activities to function effectively as catalysts for social inclusion, they should be supported by non-disabled partners or intermediaries and with appropriate fora or places for the activities.

different aspect — in sports for people with disabilities, athletes in general aim at reaching a point as close to non-disabled athletes as possible, while in arts, uniqueness or differences from non-disabled works tend to be appreciated. Related to this point, artistic activities sometimes imply criticism against the established norms of the artistic world, while sports activities of people with disabilities tend to comply with the norms of non-disabled sports.

4. Catalyst for social reform

common aspect — both sports and artistic activities of people with disabilities can give a new dimension or sharpen sensitivity in which or with which spectators and audiences appreciate sports or arts, the consequence of which may sometimes lead to the reform of existing social norms and conventions.

different aspect — because of the above-mentioned element of social criticism in arts, sports may generally be more conservative in their roles in social reform.

5. Commercial or economic activities

common aspect — in both sports and artistic activities of people with disabilities, commercialization or the creation of commercial markets for those activities and the professionalization of athletes and artists are essential for sustainability.

different aspect — sports activities have strong competitive elements, so that it is often not difficult to distinguish professionals or potential professionals from amateurs. In arts, the transition between amateurs and professionals can be seamless not only in terms of their skills but also in social exposure, as many “artists” in Japan carry out their activities in welfare institutions.

In sports, competitions are institutionalized (for example, competitions between schools, companies or local departments), thereby giving opportunities for people with disabilities to participate in sports activities either as players or vicariously as spectators outside welfare institutions. In arts, such opportunities are still comparatively limited.